

平成16年度 継続評価書

研究開発 課 題	ネットワーク・ヒューマン・インターフェースの総合的な研究開発 携帯電話等を用いた多言語の自動翻訳システム	研究開発 期 間	H15～H17
研究機関 (又は代表研究機関)	株式会社国際電気通信基礎技術研究所	代表研究 責 任 者	山本 誠一

平成16年度研究開発の目標達成（見込み）状況

評価	コメント
a	技術的な観点からは、研究開発が順調に進捗しており、設定された目標は十分達成できる見通しである。空港等の屋外での劣悪な環境条件における実証実験を通じた評価やデータ収集も進んでいる他、「知的リジェクション」によって単語誤り率を日本語で36%減少させ、翻訳品質の自動評価については TOEIC 換算値を低コストで推定する方法を開発し、日英翻訳に関しては、目標以上の成果を挙げている。日韓翻訳については今年度中にコーパスを完成できる予定であるなど、今年度の目標はすべて達成できた、あるいはできる見込みであり、極めて良い成果が出ていると考えられる。

平成16年度研究資金使用状況

評価	コメント
a	労務費を除くと、コーパス作成への支出が比較的大きな割合を占めているが、これは多言語に対応したシステムを開発する上で必須の項目であり、しかも国内ですべて収集するには限界があることを考慮すると、その必要性が認められる。 その他、予算額と執行予定額はほとんど同程度であり、計画通りの極めて効率的な研究資金運用をしていると考える。

研究開発実施計画

評価	コメント
----	------

a	<p>ア) 3、イ) 1-1、 1-2、 3-2 が当初計画には入っていたが、平成 17 年度計画からは外されている。これは、平成 17 年度予算が当初予算より削減されたことによって、主として「研究員費」および「消耗品およびその他の経費」を縮小せざるをえず、その分、研究計画が縮小されたもので、致し方ないと思う。</p> <p>予算削減を日韓システム関係の研究縮小に集中させたため、日韓関係の研究に使う予定であった研究員費を削り、日韓関係の計画の一部(タグ付けなど)が削除されるため、日韓翻訳の予想達成品質が当初計画よりも若干低くなる。</p> <p>これ以外の項目に対しては、過去 2 年間で蓄積された技術を活用することで、無理なく目標が達成できると考えられる。なお、背景雑音の多い劣悪な使用環境下でも、システムの応答時間が長くないインタフェースの実現に努力してほしい。</p>
---	--

平成 17 年度予算計画

評価	コメント
b	<p>利用者インタフェース及び全体統合に重点配分を行う予算計画となっている。研究開発期間の最終年度であることから、システムの完成に向けての妥当な配分と判断され、縮小された予算内で、十分効率的に組まれていると考えられる。</p>

実施体制

評価	コメント
a	<p>対象言語を母国語とする研究者を含めた常勤の研究者で研究開発チームを組織していること、ある程度実績のある研究者で組織していることから、特に問題はないと思われる。</p> <p>具体的には、代表研究責任者の他に、(株)エイ・ティ・アール自動翻訳電話研究所初代社長を副代表研究責任者に迎え、現国際電気通信基礎技術研究所の音声言語コミュニケーション研究所の室長 2 人を研究分担テーマのトップに据えて、各テーマについて本プロジェクトに 100%専従の研究員を配置するという研究体制であり、予定の研究内容に照らして、実戦的かつ実務的に十分納得できる体制である。</p> <p>また、日中・日韓の研究のために、中国人研究者ならびに韓国人研究</p>

	者をメンバーに入れ、かつ中国および韓国の研究機関と共同研究の体制を敷いているのは、研究内容から考えて当然とは言え、適切な措置である。
--	--

総合評価

評価	コメント
<u>a</u> <u>b</u>	<p>当初計画された目標は、予算縮小の影響による一部を除いて研究期間内に予定通り達成できる見通しがついており、これまでに開発された要素技術もすでに高いレベルに達している。従って、最終年度まで研究を継続し、インタフェースの改良や、これまでに蓄積された要素技術の統合により高いレベルでの完成度が大きいと期待できる。</p> <p>以上より、予算が削減されたにも拘らず、この研究計画は十分効率的かつ目標達成見込みが高く、予算計画および研究体制も適切であるので、プロジェクト研究として 極めて優れたものであり、引き続き研究委託を継続することが妥当である。</p>